OPINION

教　育

東京女子医科大学付属消化器病センター内科
林　直諒

大学教育改革

わが国では教育システムとしては昔から足利学校，寺子屋式教育などがあったが，近代の大学が成立したのは国家的には明治10年(1877年)からで，理工系が主流であった(村上陽一郎：科学者とは何か，新潮選書)．教育の基本は戦後までは，富国強兵に沿ったものであったが，戦後アメリカ教育使節団の報告の指針に基づき，勅令主義から国民主権の憲法原理に従い，民主主義と平和主義と個人の尊厳の尊重を基本原則とするようになった．アメリカの大学の理念を取り入れ，民主的な社会の形成者として，教養ある，視野の広い自由な人格を育てるため，専門教育と並んで一般教養が重視された．したがってそのときの大学卒業資格として124単位中，人文，社会，自然の3系列の一般教養科目12単位ずつ計36単位と，外国語8単位，保健体育4単位が必要であった．現在でもその理念，具体策は理想的に思えるが，大学および大学生の現状について多くの批判がなされてきたことも事実であった．そして，これらの基準も当面する厳しい社会の現実と教育を担当する教養部に内在する欠陥のため崩壊に向かった（白田貴郎千葉大学名誉教授：倫理学)．その後平成3年1月に大学審議会は――

① 一般教養と専門教育の区分の廃止
② 大学・大学院の自己評価システムの導入
③ 大学制度の見直し

の三つの柱からなる答申を提出した．これに基づき，各大学で自由度の高いカリキュラム編成を伴う改革が開始された．

医学教育改革

医学教育改革も最近大学教育の改革が進んでいる状況のなかの一つともいえる．

医学部以外の学部卒業生は就職すると，会社によって，社会人としての態度・振舞い，社会常識一般，専門に関する訓練が期間を設けて行われることが多かったが，医学部（および卒後教育）終了後は，教養・社会常識の一般の教育がなされることはまれであった．最近では患者・医師関係，医師・他の医療従業者関係の在り方は以前と比べ大幅な変化がみられ，医学部における（医局でも同様であるが）教育のなかで，新しい観点からの人間関係についての教育も重要になってきた．医学部でも患者さんとの接し方，チーム医療などに関する実習が取り入れられてきている．しかしながら，それぞれ異なった人生を送り，さまざまな人生観をもった患者さんを理解し受け入れることは，柔軟な対応ができる訓練が必要であり，価値観の多面性を理解する教養も必要である．これら医師に要求されている，専門知識・技術と高い教養レベルを考えると，6年間の教育期間は不十分で，最近学士入学が勧められていることや卒後教育が重視されていることも理解できる．

教育の目的も少なくとも一面では，時代や国家，経済の在り方と密接な関係がある．一方，教育される側にとっても時代・社会環境の影響は少なくない．現実に授業における学生の気質，態度には意外で，理解しがたいことも経験する．

教育における段階

教養全体に目を広げれば，最近の世情を反映しているのかわからないが，幼児期から成人に至る教育の全過程が多くの社会的事象から問題化してきている．最近では高校，中学ばかりでなく，小学校においても子供のありようが変わったという現場の教師たちの意見をしばしば耳にする．

世間的には大学を卒業しても職業人としてのみならず，社会人としての常識すら十分訓練されていないという見方が以前からいわれていた．それについて大学は躾の教育と社会常識については高校での教育が十分でないといい，高校では中学での教育ができていないといい，中学は小学教育が十分でないといい，小学校の先生は家庭教育に欠陥があるという話もあり，これは堂々巡りになるばかりでなく，なんら進展性もないことになる．現在においてはわが国における教育の目的は，人間一人一人が充実した人生を送れるような人間社会を構成することのできる人間を育てることが基本である．教育は教育される側の肉体的，心理的発展段階に合わせなければ効果が上がらない．たとえば，子供は2歳になると，自分のしたいと思うことと他人のしたいと思うことを区別することができるようになる（心の個別性の芽生え）．しかし2，3歳では自分と他人で目に見える現実の間の区別ははっきりと確立はされていない．4歳になって他人が自分とは違うことを考える場合があるとはっきりと認識できるようになるという（柳沢桂子：われ

われはなぜ死ぬのか，草思社)．

小学校教育に関して子供の発達に合わせてきめ細かい教育を考え，実行したのはルドルフ・シュタイナーである．彼の考えによれば9歳，10歳以前の子供は自分と周囲を区別していない，子供は世界全体のなかにいると感じており，世界全体が自分と同族だと感じているという．したがってこの年齢では，動植物も，鉱物も人間と同じように話し合うようなファンタジーに基づいた授業を構築することが大切と述べている．また12歳ごろになってはじめて子供は原因と作用について理解できるようになるので，鉱物学，物理学，化学は11歳と12歳の間のカリキュラムにこれらを入れ，それ以前に教えないということである（西川隆範訳，ルドルフ・シュタイナー：人間理解からの教育，筑摩書房)．

理想的にはそれぞれの年齢でなされるべき教育がなされたうえで大学入学してくることがよいわけであるが，われわれとしては現状ではすでに高校を卒業して入学してきた医学生の教育ということであるので，それまでに受けてきた，あるいは受けるべき教育(欠けている点があるという前提で)を含めて，現実の実態から考える必要がある．ここで教育全体を五つのレベルに分類・整理してみた．

1．躾の教育

① わがままをしない

② 他人に迷惑をかけない

③ 嘘をつかない

④ 怠けない

⑤ やりっ放しにしない

この5項目は昔から親から教えられていた項目であり，臨済宗の耕雲庵英山老師はこれだけは身につけないと人間的成長を遂げることはできないと喝破している（立田英山：人間形成と禅)．

①わがままをしないこと，②他人に迷惑をかけないこと，は幼いときに躾るのが基本であろう．以前はほとんどの親が，子供が歩きはじめる前から泣いて騒いでいても，駄目なものは駄目（世の中には自分の思うままになることばかりではないこと，理屈ぬきに，してはいけないことがある)，ということで我慢することを躾ていたし，歩けるようになると，バス，電車の座席に着くときは靴の泥が他人につかないよう注意したり，騒ぐと他人に迷惑がかかることを注意したりしている情景をしばしば見たものである．この二つがきちんとしていないと自己中心的な性格がきわめて強くなり社会的欠陥ができる．③嘘はつかない，が欠けると人間関係が不安定なものになる．④怠けないことと，⑤やりっ放しにしないことは自分自身にとっても，かかわりをもつ他人にとっても爽や

かな気分で生きるのに必要な条件である．

2．社会生活の基礎の教育

昔でいえば読み書きソロバンということになるが，他人との意志の疎通がとれること，社会・経済・政治の仕組みと，そのなかでの自分の立場・役割が理解できることが必要である．そのためには言葉を理解し，話すことができ，読むこと，書くこと，数学，ができなければならない．

3．専門教育

① 専門的知識

② 専門的技術

これについては付け加えることはない．

4．教養人としての教育

① 人文（哲学，言語，文学，歴史）

② 社会

③ 自然

自分が歴史のなかで，および自然環境，社会環境のなかで，どのような位置にいて，自分の存在自体がどれだけそれらの恩恵をうけているかの理解（反省と感謝の念）がないと，人類のより良い将来を築いていくことに寄与することは困難になる．このレベルの教育は大学教育でもっとも重要な点であろう．

5．知恵の教育

心理，精神医学，哲学，宗教

ここでは，人間の意識すべてを包括・統合した学問としてトランスパーソナル心理学があり(総説としては，岡野守也：トランスパーソナル心理学，青土社)，その第一人者といわれる Ken Wilber の主著，The spectrum of conciousness（翻訳，吉福伸逸，管靖彦訳：意識のスペクトル，春秋社）を紹介するにとどめる．

以上教育項目を段階的に述べたが，1 は幼児期，2 は小中学校，3，4 は高校，大学，5 は大学，社会という順で，それぞれの年代でしっかり教育を受けるのが理想であるが，現状では，遅れても手遅れということはないと考えないと絶望的になる．手遅れになった親に育てられた子供は，先天的といっていいほど手遅れということになり，これからの教育は成り立たなくなる．躾の教育については実行ということになるといくつになっても完全には出来ないので，繰り返しが大切であり，小学校でも，中学校でも，高校でも，大学に入学しても何度も 1 から繰り返し確認しつつ，何世代かかけて人間教育を完成することが重要でありかつ現実的であると思う．